

## 連載が伝えたメッセージ

「行動する技術者たち」最終回は、連載への取組みにご支援いただいた、お二人にインタビューをいたしました。まず、連載の企画段階からかかわっていただいた政策研究大学院大学教授 森地茂先生にお話しを伺いました。

### 連載は、土木技術者への呼びかけ

この連載の意図は、土木技術者自身の社会的地位を上げるために社会に対してしっかり認識してもらおうというPRもありましたが、主たる目的はそれではなくて、「土木技術者自身が、『核になる人材』としての意識をもちましよう」という呼びかけだったのです。だから土木学会誌の連載なんですね。

その呼びかけの中身は二つです。一つは、「総合性をもちましよう」ということです。私は土質だ、私はコンクリートだとか言わないで、本来のシビルエンジニアというマインドで、自分たちのスコープを広げて貢献しましようということです。もう一つは、「情報発信力を高めましよう」ということです。私自身、土木屋は縁の下の力もちがかっこいいと思うのですが、みんながそういうふうに思っていたのではうまくいきません。この連載で残念だったのは、読者の皆さんに応募を呼びかけたのですが、なかなか出てこなかったことです。ハードの人がもつといて、あちこちからそんな人が出てくるのかなと思っていました。

### 地域に貢献できる土木技術者の資質

今度の国土形成計画では、広域地方圏のブロックごとに独自の戦略をもってください、それぞれの地域は国内でなく、アジアのなかで個性をもってくださいということを言っています。これは、「言うは易し、行うは難し」で、最大の問題は『核になる人材』です。

それは一体誰だろうということを考えますと、役所の人では所掌事務があり動きにくい部分が、民間の人では、自分の業態のところだけしか見えない部分がありました。国土形成計画でいう「地域力の結集」ということが行われてこなかったのです。

これは、限られた人しかできないことだと思えます。土木の人たちは、官も民も含めて、他のバックグラウンドをもつ人に比べ、圧倒的にその機能をもっています。土木技術者は、パブリックマインドというのが骨の髄まで染み込んでいますから、そういう意味でますます役割は大きくなるでしょう。

神戸の地震以来、ボランティア活動やNPOの活動といった地域力に関しては非常にいい面が出てきて、国際的に見ても恥ずかしくないレベルにだんだんきています。それでも、行動しようとしたときの環境や住民側の受け取り方、そのなかでコンフリクト(衝突)をどう解決するかとか、いろいろな問題を抱えています。

コーディネーションをするときに、もともとそこにいる人はもちろん重要なんですけど、いろいろなしがらみがあったりします。また何より、地元の良さが当たり前になっていて、外の人を訪れたときに初めてそれがわかるといった面が結構あるんです。ローマの歴史、シルクロードの歴史、楽市楽座、江戸の参勤交代、また現在の東京、アメリカ合衆国とか、結局、違う人たちが混じったときにいろんなことが出てきて、そこに活力が生まれ新しい文明が生まれるというのは、人類の歴史の本筋ですよ。地域活性化の王道だと思います。

そういう地域活性化に貢献できる資質が、土木技術者にはあります。専門となる活動範囲は防災だったり福祉だったりしますが、地域活性化では、それぞれ自分の分野からウイングを広げてカバーできる人たちが大変重要になってきます。そのような面で、土木技術者というのは、多くの人々が現場を渡り歩いて仕事をするという環境で育ってきているので、そういうミッションを受け入れやすいグループであるという気がします。



行動する技術者への思いを熱く優しく語る森地教授



連載を進めるにあたって、ご指導ご助言をいただきました土木学会の古木守靖専務理事にお話しを伺いました。

## 国境・固定観念にとらわれない、エンジニアリングデザイン能力に長けた技術者たち

連載で紹介された技術者たちはそれぞれに、うっかりすると見逃したり、できないとあきらめてしまいそうな地域や広域的な課題に対して、アイデア、熱意、研究心などをもってチャレンジされ、かつ多くの関係者の理解や協力を得てすばらしい解決策を導入しています。国分寺市の「『無用の水』が『恵みの水』に」が典型でしょう。最近の話題に即していえばエンジニアリングデザイン能力に長けた方々だと思います。また、技術者たちは土木の固定概念にとらわれず、経済、社会そして人間の信頼関係のもとにプロジェクトを成功に導いています。これこそシビルエンジニアの典型であり、社会の将来を築くインフラを提供し、市民工学を担う土木技術者の本分だと痛感しました。さらに、簡易舗装のモンゴルへの技術移転やりんごの中国への輸出などに見られるように、国境がないことです。地球上には国境は描かれていませんが、シビルエンジニアの原点をここに見出せるのではないのでしょうか。

## 国土・地域づくりを担う技術者への支援

土木学会では、調査研究活動、学会誌や講習会などによる情報提供・普及活動、技術者の自己研鑽を目的とした継続教育制度(CPD)、優れた技術者を認定する資格制度などを行っています。また、今後は会員、技術者が地域と接触し、課題と向き合い、企業や大学とのコラボレーションによる地域活性化への貢献を目指す支部活動も必要です。

とりわけ、技術者資格制度については、時代の潮流に即するだけでなく、一生にわたる技術研鑽と連動した仕組みが必要で、土木の信頼性向上に資する「顔の見える土木技術者」の育成を支援していくこととしています。具体的には、①特別上級を除く技術者試験は非学会員へも門戸を開き、2級試験をコンピュータ化し、②現場での経験を重視して審査する実務コースを設立し、③他の学協会と連携のもとで継続教育制度の充実を図っていくことなども一例です。

## 総合プロデューサーとしての土木技術者

今後、単に構造物の構築のみでは解決しない問題、課題が増えていくと考えられ、「合わせ技」がますます必要となるでしょう。その際には、土木以外の領域との連携や

国際的な連携を担ったり、行政や研究、さらに NPO 活動の中心となる土木技術者が多くなると考えられます。そのため、今後一層、地域や社会の問題を見出し解決する能力を有する技術者、さらにはアジアに豊かな隣人が増えることを目指すような倫理観と広い見識を有する技術者が育ってくれることを期待しています。

学会としても、そのためのお手伝いができるよう努めてまいります。



土木技術者への期待を熱く語る古木専務理事

## 連載を終えるにあたって

この連載では、各地域の再生に向けて新しい価値をつくり出している技術者たち、あるいは新たな時代の国土・地域づくりに向けて未知の領域で先駆的に挑んできた技術者たちを紹介してきました。取材のたびに、技術者たちの語りからは、いくつかの壁や挫折を克服する「地域への想い、地域への愛」、人としての魅力、エネルギーを熱いメッセージとともに直感することができました。

取材は一貫して、単に結果を紹介するのではなく、技術者たちの行動・思考の軌跡を読者に伝えることに重きを置きました。そこには、常に彼らをサポートする地域の仲間や風景がありました。われわれ取材班は、毎回原稿の締切に追われながらも、同じ技術者として彼らの行動力や発想力に対して、素直に憧れたり、ジェラシーを感じました。これが、われわれの喜びであり、連載することの原動力であったかもしれません。一方、連載を通して従来の土木の領域を超えたところに、技術者の大きな役割があることも確信しました。

学会誌での連載は終了しますが、引き続き、多くの「行動する技術者たち」を取材し、紹介し続けたいと考えています。

「行動する技術者たち」取材班一同